

《朱子語類》における方向補語

蔡娟

Directional Complements in Zhuzi Yulei

Cai Juan

【内容提要】

本文初步考察了《朱子語類》第97~140卷中粘合动趋式和组合动趋式补语结构的用法。两种动趋式表意功能相近，但使用频率相差悬殊。粘合动趋式出现的次数约为组合动趋式的8.8倍，补语动词较之组合动趋式更为丰富。此外，粘合动趋式与其他句法结构的结合能力也更强。在现代汉语“普通话”中，组合动趋式已不再使用。文章认为，两种动趋式在表意功能上的相似性，以及粘合动趋式在结构上的无标性是致使组合动趋式逐渐衰退的主要原因。

【キーワード】 《朱子語類》；方向補語；「V+C」方向式；「V+P+C」方向式

目次

- 0. はじめに
- 1. 「V+C」方向式
 - 1.1 「V+C₁/C₂」方向式
 - 1.1.1 「V+C₁」方向式
 - 1.1.2 「V+C₂」方向式
 - 1.2 「V+C₁C₂」方向式
- 2. 「V+P+C」方向式

- 2.1 「V+將+C」方向式
- 2.2 「V+得+C」方向式
- 2.3 「V+取+C」方向式
3. 「V+C」方向式と「V+P+C」方向式の比較研究
4. おわりに

0. はじめに

《朱子語類》は南宋の理学家である朱熹¹⁾の門人が朱熹の講義録や談話録を集めたもので、全140巻あり、咸淳六年（1270年）に黎靖徳により編纂された。《朱子語類》は南宋文人階層の口語が反映されており、研究価値が極めて高いと考えられる。刘子瑜（2008：275）では、“就语言的地域特征来说，《朱子语类》虽然反映的是以当时中原口语为基础的通语，但就朱熹本人及语类记录者的籍贯和生活经历来看，《朱子语类》的语言应该带有南方方言特点。”としている。

方向補語は述語動詞の後ろに付き、述語動詞が表す動作・行為の方向、結果或いは動態について補足説明を行う文成分である²⁾。小稿では、《朱子語類》

¹⁾ 朱熹（1130～1200年）、字は元晦または仲晦、号は晦庵・晦翁・云谷老人・考亭・紫阳などがある。祖籍は徽州婺源県（現在の江西省）で、南閩州尤溪県（現在の福建省）に生まれ、朱子学の創始者である。

²⁾ つまり、方向補語は方向義、結果義と動態義を表すことが可能である。方向義は方向補語の基本的な意味である。「人や物の空間的な移動方向」を示すが、それには具体的な移動と抽象的な移動が含まれている。抽象的な方向義は、例えば、「所属関係や所有関係の変化」を表す“買來”、“借出”などであり、補語の語義対象は受動者或いは動作主（当事者も含む）である。結果義は方向義から派生したもので、移動方向を表すのではなく、「述語動詞の表す動作・行為が実現して、ある結果になったこと或いは目的に達したこと」を表す。この場合、補語の語義対象も受動者或いは述語動詞の表す動作・行為である。動態義は、結果義から更に虚化したもので、「動作の開始・持続」を表す。補語の語義対象は述語動詞の表す動作・行為である。補語が方向義、結果義、動態義のうちどの意味を表すかは述語動詞の語義に関わる。一般的に、述語動詞を方向動詞が担当する場合、補語は方向義を表す（例：“上來”、“出去”など）。一方、述語動詞を普通の動作・行為を表す動詞が担当する場合、a) 述語動詞の表す動作・行為が対象物を移動させた場合には、補語は方向義を表す（例：“放下”、“拿來”など）。b) 述語動詞の表す動作・行為が対象物に移動をもたらさない場合、補語は結果義或いは動態義を表す傾向がある（例：“寫下”、“笑起來”など）。

における方向補語構造を取り上げ、述語動詞と補語の間に文法標識P（Particle 以下、Pと略記）があるかどうかにより、「V+C」³⁾方向式（“粘合动趋式”）と「V+P+C」方向式（“组合动趋式”）の2大類に分類し、具体的な用例をあげながら、「V+C」方向式と「V+P+C」方向式が構文上、意味上の特徴を描写する。構文上、主に述語動詞、方向補語、客語など各要素の音節上の特徴、文法機能、位置関係、及び他の文法構造との結合状況について考察する。意味上は主に各類型の方向補語構造の意味表現を分析する。《朱子語類》における「V+C」方向式と「V+P+C」方向式を比較し、両形式の使用頻度および補語動詞との共起状況を表でまとめる。また、唐五代の方向補語の用法を参照し、《朱子語類》に見られる方向補語の変化についても検討する。

《朱子語類》は分量が多いため、小稿は原則として、全140巻のうち、会話が多い97～140巻（7冊と8冊）を重点的に考察し、必要に応じて全140巻を調査する。

1. 「V+C」方向式

「V+C」方向式は述語動詞と方向補語の間に文法標識がなく、方向補語が直接述語動詞の後ろに付く構造であり、《朱子語類》には1541例見られる。補語動詞Cの成分により、「V+C」方向式を「V+C₁/C₂」方向式と「V+C₁C₂」方向式に分けられる。

1.1 「V+C₁/C₂」方向式

C₁、C₂は“单纯趋向补语”と呼ばれ、C₂は“來”、“去”であり、C₁は“來”、“去”を除く“上”、“出”などの単音節方向動詞である。《朱子語類》には「V+C₁/C₂」方向式が1325例見られる。以下は「V+C₁/C₂」方向式を「V+C₁」方向式と「V+C₂」方向式に分けて論述する。

1.1.1 「V+C₁」方向式

《朱子語類》には「V+C₁」方向式が628例見られる。述語動詞は“將”、

³⁾「V」はVerb 述語動詞、「C」はComplement 補語動詞、以下同様。

“放”、“搬”などの動作・行為動詞であり、主に単音節動詞が担当するが、“附會”などの二音節動詞の例も見られる。補語になるのは“上”、“下”、“出”、“入”、“起”、“過”、“開”、“回（回）”、“歸”などの単音節方向動詞であり、全て方向義を表すことが可能である。次の例がある。

- (1)黄伯耆者，他已差做相視官，定了不簽他；他又來，須要簽，又換文字將上。(卷一百七，2668 頁)⁴⁾
- (2)此心既存，則雖不讀書，亦有一箇長進處；纔一放蕩，則放下書冊，便其中無一點學問氣象。(卷一百一十五，2775 頁)
- (3)是時恐諸軍變，魏公乃與湯商量，先搬出犒賞錢，使人將舊赦書於樓上宣之。(卷一百二十七，3052 頁)
- (4)又如脾胃傷弱，不能飲食之人，却硬要將飯將肉塞入他口，不問他喫得與喫不得。(卷一百二十四，2970 頁)
- (5)禪家言偷生奪陰，謂人懷胎，自有箇神識在裏了，我却撞入裏面，去逐了他，我却受他血陰。(卷一百二十六，3032 頁)
- (6)又將起扇子云：“公只是將那頭放重，這頭放輕了，便得。若兩頭平，也不得。”(卷一百一十八，2854 頁)
- (7)一件事走過眼前，匹似閑，也有箇道理，也有箇是非。(卷一百一十四，2759 頁)
- (8)玉山應口對云：“龍爪拏開黯黯雲。”(卷一百三十八，3290 頁)
- (9)吳玠到饒風關却走回，此事惟張巨山《退虜記》得實。(卷一百三十二，3166 頁)
- (10)又如人做家主，要錢使，在外面百方做計，壹錢也要將歸。(卷一百二十，2908 頁)

補語“上”、“下”、“出”、“起”、“過”、“開”は結果義を表すことが可能である。「V+上」は「対象物に付着・接触する」(例 11)を、「V+下」は「述語動詞の表す動作・行為によって付着させる」(例 12)を、「V+出」は「無から有へと変化する」(例 13)を、「V+起」は「接合する」(例 14)を、「V+過」は「超越」・「完結」(例 15)を、「V+開」は「分離・拡張」(例 16)

⁴⁾ 小稿では 1986 年に中華書局が刊行した《朱子語類》を使用する。

という結果義を表す。

- (11)又各人合下有箇肚私見識，世間書、人，無所不有，又一切去附會上，故皆偏側違道去。（卷一百二十一，2946頁）
- (12)若寫下，未必分明，却失了先問言語。（卷一百一十九，2871頁）
- (13)又有口以爲是，心實非之，存在胸中，不知不覺做出怪事者，茲尤可畏！（卷一百三十二，3174頁）
- (14)及子弟漸長，逐間接起，又接起廳屋。（卷一百三，2601頁）
- (15)纔除橫行，便可越過諸使，許多等級皆不須歷，一向上去。（卷一百二十八，3075頁）
- (16)似謂放開是自然豁開乃得之效；未得，則只是守此。（卷一百一，2566頁）

補語“起”はまた「新たな状態に入る」という動態義を表すことができる（例17）。

- (17)“太極動而生陽”，亦只是從動處說起。（卷一百一十六，2794頁）

「V+C₁」方向式は対象客語、結果客語と場所客語を伴うことができる。一般的に、場所客語と結果客語が「V+C₁」方向式の後ろに置かれる（例4、例13など）。ほとんどの対象客語も「V+C₁」方向式の後ろに置かれる（例2、例3など）が、VとC₁の間に置かれる例もたまに見られる（例18）。

- (18)說一段過又一段，何補！（卷一百一十九，2879頁）

「V+C₁」方向式の否定形式は「V+C₁」方向式の前に否定副詞“不”、“不曾”、“未曾”などが置かれ、「Neg+VC₁」⁵⁾の形である。

- (19)安卿問：“《曲禮》‘外言不入於闔，内言不出於闔’一段甚切，何故不編入《小學》？”（卷一百五，2628頁）

- (20)曰：“常常憂此，但措置亦未曾說出。”（卷一百二十三，2962頁）

「V+C₁」方向式が処置文（例4）や受身文（例21）と共起する例が見られる。

- (21)才交談，便被石霜降下。（卷一百三十二，3184頁）

⁵⁾「Neg」は Negative Adverb 否定副詞、以下同様。

1.1.2 「V+C₂」方向式

《朱子語類》には「V+C₂」方向式が697例見られる。述語動詞は“將”などの動作・行為動詞或いは“歸”などの方向動詞であり、単音節動詞が多く見られるが、“湊合”などの二音節動詞も見られる。補語になるのは単音節方向動詞“來”、“去”である。“來”は主に「人或いは物が空間的に話し手側に移動する」という方向義を表す（例22～24）が、“看來”、“論來”など「推測」を表す例（例25）もあり、単語化された傾向がみられる。

(22)譬如人將一塊生薑來，須知道是辣。（卷一百二十一，2917頁）

(23)理會，四面湊合來，自見得是一理。（卷一百一十七，2820頁）

(24)“戒慎恐懼”雖是四箇字，到用著時無他，只是緊輟約令歸此窠臼來。
（卷一百一十三，2742頁）

(25)某看來，樂處說也未盡。（卷一百九，2692頁）

補語“去”は「人或いは物が空間的に話し手から離れる」という方向義（例26、例27）、「述語動詞の表す動作・行為によって対象物を元の場所から除く」という結果義（例28）、或いは「述語動詞の表す動作・行為の持続」という動態義（例29）を表す。

(26)而今這種子只在地面上，不曾入地裏去，都不曾與土氣相接著。（卷一百二十一，2922頁）

(27)又如弱人與強人相牽一般，強人在門外，弱人在門裏，弱底不能勝，便被強底拖去了。（卷一百二十，2899頁）

(28)然他大段用功，少間方會漸漸掃去那許多鄙俗底言語，換了箇心胸，說這許多言語出來。（卷一百四，2613頁）

(29)聖人教人，皆從平實地上做去。（卷一百二十四，2980頁）

「V+C₂」方向式は対象客語と場所客語を伴うことができる。対象客語と場所客語が主にVとC₂の間に置かれる（例22、例24など）が、「V+C₂」方向式の後ろに置かれる例（例30、例31）も見られる。

(30)學者先須除去此病，方可進道。（卷一百一十四，2756頁）

(31)如這水流來下面，做幾箇塘子，須先從那第一箇塘子過。（卷一百一十九，2870頁）

「V+C₂」方向式の否定形式は「V+C₂」方向式の前に“不曾”などの否定

副詞が置かれ、「Neg+VC₂」の形である（例26）。

「V+C₂」方向式が処置文（例32）や受身文（例27）と共起する例が見られる。

- (32) 後來雖不念佛，來誦《大學》、《論》、《孟》，却依舊趕徧數，荒荒忙忙誦過，此亦只是將念《大悲呪》時意思移來念儒書爾。（卷一百二十，2914頁）

1.2 「V+C₁C₂」方向式

《朱子語類》には「V+C₁C₂」方向式が216例見られる。述語動詞は動作・行為動詞であり、主に“將”、“做”、“飛”などの単音節動詞が担当するが、“迸裂”、“尋討”、“傳襲”、“發明”などの二音節動詞の例も見られる。補語は“上來”、“上去”、“下來”、“下去”、“出來”、“出去”、“入來”、“入去”、“起來”、“起去”、“回來（回來）”、“過來”、“過去”、“開去”、“歸來”⁶⁾などの複合方向動詞であり、“复合趋向补语”と呼ばれる。“起去”を除き、他の複合方向補語は全て方向義を表すことが可能である。

- (33) 只常將上來思量，自能有見。（卷一百一十五，2776頁）
- (34) 大凡爲學有兩樣：一者是自下面做上去，一者是自上面做下來。（卷一百一十四，2762頁）
- (35) 水又成沫，地自生五穀，天上人自飛下來喫，復成世界。（卷一百二十六，3025頁）
- (36) 如大路看不見，只行下偏蹊曲徑去。（卷一百二十五，2992頁）
- (37) 思量這道理，如過危木橋子，相去只在毫髮之間，才失脚，便跌落下去！（卷一百四，2621頁）
- (38) 不知如何，一婢走出來告云，日逐有官員來議事。（卷一百三十三，3185頁）
- (39) 蓋他氣力大，如大魚相似，看是甚網，都迸裂出去。（卷一百三十，3108頁）

⁶⁾ 「V+歸來」は《朱子語類》（卷十二，217頁）に“靜坐則本原定，雖不免逐物，及收歸來，也有箇安頓處。”の1例が見られ、「対象物を空間的に元の場所に戻す」という方向義を表す。

(40)或云：“嘗見人說，凡是外面尋討入來底，都不是。”（卷一百二十一，2941 頁）

(41)若便要說天大無外，則此心便瞥入虛空裏去了。（卷九十八，2519 頁）

(42)十分思量不透，又且放下，待意思好時，又把起來看。（卷一百四，2616 頁）

(43)但纔覺得此心隨這物事去，便與他喚回來，便都沒事。（卷一百二十，2910 頁）

(44)金溪之學雖偏，然其初猶是自說其私路上事，不曾侵過官路來。（卷一百二十三，2961 頁）

(45)若不問來由，一向直走過均亭去，迤邐前去，更無到建陽時節。（卷一百二十，2889 頁）

(46)只有《大學》教人致知、格物底，便是就這處理會；到意識、心正處展開去，自然大。（卷一百二十，2910 頁）

補語“下來”、“出來”、“出去”、“起來”、“過來”、“過去”、“開去”は結果義を表すことが可能である⁷⁾。「V+下來」は「固定する」（例 47）を、「V+出來」と「V+出去」は「無から有へと變化する」（例 48、例 49）を、「V+起來」は「接合する」（例 50）を、「V+過來」は「正常、或いは積極的な状態に變化する」（例 51）を、「V+過去」は「動作・行為の実現」（例 52）を、「V+開去」は「分散・發展する」（例 53）という結果義を表す。

(47)律是《刑統》，此書甚好，疑是曆代所有傳襲下來。（卷一百二十八，3081 頁）

(48)伊川又別發明出義理來。（卷一百一十七，2814 頁）

(49)當時若寫此文字出去，誰人敢爭！（卷一百七，2660 頁）

(50)雖是恁地，也須低著頭，隨衆從“博學、審問、慎思、明辨、篤行”底做工夫，襯貼起來方實，證驗出來方穩，不是懸空見得便了。（卷一百一十七，2828 頁）

(51)他却事事理會過來。（卷一百三十六，3235 頁）

⁷⁾《朱子語類》には「V+C₁+O+C₁C₂」方向式（O は客語）が 1 例見られる：後被朝廷寫下《常平法》一卷下來，也不道是行得行不得，只休了。（卷一百一十一，2717 頁）「無から有へと變化する」という結果義を表す。

52) 若未曉，且看過去，那時復把來玩味，少間自見得。（卷一百二十，2886頁）

53) 天下道理，各見得恁地，剖析開去，多少快活！（卷一百三，2608頁）
補語“起來”、“起去”は動態義を表すことができる。「V+起來」は「新たな状態に入る」（例54）を、「V+起去」は「動作・行為の開始且つ持続していく」という動態義（例55）を表す。

54) 到這裏，自說盡，無可說了，却忽然說起來。（卷一百三十九，3312頁）

55) 韓不用科段，直便說起去至終篇，自然純粹成體，無破綻。（卷一百三十九，3320頁）

「V+C₁C₂」方向式は対象客語と場所客語を伴うことができる。場所客語は全て複合方向補語C₁とC₂の間に置かれる（例36、例41など）。対象客語はC₁C₂の前に置かれる形式（例49）と、C₁、C₂の間に置かれる形式（例48）がある。

「V+C₁C₂」方向式が、同時に場所客語と対象客語を伴う例が2例見られ、対象客語がC₁C₂の前に置かれ、場所客語がC₁とC₂の間に置かれている。

56) 或曰：“是將自家這身入那事物裏面去體認否？”（卷九十八，2518頁）

57) 入道之門，是將自家身已入那道理中去，漸漸相親，久之與己爲一。（卷一百二十一，2918頁）

「V+C₁C₂」方向式の否定形式は否定副詞“不”、“不會”、“未曾”が「V+C₁C₂」方向式の前に置かれ、「Neg+VC₁C₂」の形である。

58) 更是他書了，亦不將出來，據他書放那裏，知他是不是！（卷一百七，2665頁）

59) 謂雖未曾說出來時，存於心中者，已斷是如此了，然後用得戒慎恐懼存養工夫。（卷九十七，2489頁）

「V+C₁C₂」方向式が受動式と共起する例が見られる。

60) 却見得他底高，直是玄妙，又且省得氣力，自家反不及他，反爲他所鄙陋，所以便溺於他之說，被他引入去。（卷一百二十六，3036頁）

61) 此老當國，却留意故家子弟，往往被他牢籠出去，多墜家聲。（卷一百三十一，3154頁）

2. 「V+P+C」方向式

「V+P+C」方向式は述語動詞と方向補語の間に“將”、“得”、“取”などの文法標識が挿入されている方向補語構造であり、《朱子語類》には176例見られる。以下は、「V+將+C」方向式、「V+得+C」方向式と「V+取+C」方向式に分けて論述する。

2.1 「V+將+C」方向式

《朱子語類》には「V+將+C」方向式が132例見られる。文法標識“將”は「動作・行為の持続」を表す⁸⁾。述語動詞は主に“説”、“做”、“湧”、“斫”などの単音節動詞が担当するが、“理會”、“收斂”、“勾引”などの二音節動詞と“操存涵養”などの連語の例も見られる。補語になるのは単音節方向動詞“來”、“去”、“上”、“出”と複合方向動詞“下去”、“出來”、“出去”である。

(62)楊通老云：“天下事體固是說道當從原頭理會來，也須是從下面細處理會將上，始得。”（卷一百六，2648頁）

(63)到得說將出，都離這箇不得，不是要安排如此。（卷一百五，2631頁）

(64)固不免有散緩時，但才覺便收斂將來，漸漸做去。（卷一百一十三，2744頁）

(65)他也只是說將去，那裏面曲折精微，也未必曉得。（卷一百，2547頁）

(66)五者從頭做將下去，只微有少差耳，初無先後也。（卷一百二十一，2941頁）

(67)劉原父才思極多，湧將出來，每作文，多法古，絕相似。（卷一百三十九，3313頁）

(68)如《天下篇》後面乃是說孔子，似用快刀利斧斫將去，更無些礙，且無一句不著落。（卷一百二十五，2989頁）

(69)若於日用間試省察此四端者，分明迸趨出來，就此便操存涵養將去，便是下手處。（卷一百一十八，2846頁）

「V+將+C」方向式は客語を伴う例が2例しか見られていない。対象客語

⁸⁾ 蔡娟 2013a 参照。

は「V將」と補語Cの間に置かれ（例70）、場所客語は複合方向補語C₁とC₂の間に置かれている（例71）。

(70)後人讀《詩》，便要去捉將志來，以至束縛之。（卷一百一十七，2813頁）

(71)待尋得見了，好與奪下，却趕將出門去！（卷一百二十四，2973頁）

「V+將+C」方向式の否定形式は1例しか見られず、否定副詞“不曾”が「V+將+C」方向式の前に置かれる。

(72)事也不攙前去做，說也不曾說將出，但任你做得狼狽了，自家徐出以應之。（卷一百二十，2913頁）

また、「V+將+C」方向式が処置文（例73）や受身文（例74、例75）と共起する例が見られる。

(73)公且試將所說行將去，看何如。（卷一百二十一，2934頁）

(74)如自家有一大光明寶藏，被人偷將去，此心還肯放捨否？（卷一百二十一，2919頁）

(75)所說事有善者可從，又有不善者問之，依舊從不善處去；所思量事忽爲別思量勾引將去，皆是自家不曾把捉得住，不干別人事。（卷一百一十八，2849頁）

意味上、「V+將+C」方向式は方向義（例67、例71など）、結果義（例63、例68など）或いは動態義（例65、例69など）を表すことが可能である。

2.2 「V+得+C」方向式

《朱子語類》には「V+得+C」方向式が40例見られる。文法標識“得”は「動作・行為の実現・完了」を表す。述語動詞は主に“寄”、“帶”、“説”、“捉”などの単音節動詞が担当するが、“整頓”、“尋討”などの二音節動詞の例も見られる。補語になるのは単音節方向動詞“來”、“去”、“起”、“出”、“下”と複合方向動詞“出來”、“歸來”である。「V+得+C」方向式は対象客語を伴うことができる。対象客語は「V得」と補語Cの間に置かれる。

(76)近日陸子静門人寄得數篇詩來，只將顏淵、曾點數件事重疊説，其他《詩》、《書》、禮、樂都不説。（卷一百一十七，2829頁）

(77)後説花云云，今人只說道戎王子自月支帶得花來。（卷一百四十，3326頁）

- (78)若不見得大底道理，如人無箇居著，趁得百十錢歸來，也無頓放處；況得明珠至寶，安頓在那裏？（卷一百二十一，2926 頁）
- (79)若是心在上面底人，說得話來自別，自相湊合。（卷一百一十四，2755 頁）
- (80)本朝歐陽公排佛，就禮法上論，二程就理上論，終不如宋景文公捉得正賊出。（卷一百二十六，3038 頁）
- (81)如何先主纔整頓得起時，便與壞倒！（卷一百三十六，3237 頁）
- (82)大凡事理，若是自去尋討得出來，直是別。（卷一百二十，2883 頁）
- (83)只從外面見得些皮膚，便說我已會得，筆下便寫得去，自然無暇去講究那精微。（卷九十七，2493 頁）
- (84)如爲孝只是爲孝，又何必以一事助之？某看得來，又不止此。（卷九十七，2484 頁）

「V+得+C」方向式の否定形式は「V+得+C」方向式の前に否定副詞“不曾”、“未曾”などが置かれ、「Neg+V得C」の形である。

- (85)這箇便見公不曾看得那物事出，謂之無眼目。（卷一百一十四，2756 頁）
- (86)曰：“只是君元不曾放得下。”（卷一百一十七，2810 頁）
- (87)如今未曾看得正當底道理出，便落草了，墮在一隅一角上，心都不活動。（卷一百二十一，2929 頁）

「V+得+C」方向式が処置文と共起する例が例 88 の 1 例見られるが、受身文と共起する例が見られない。

- (88)命便是水恁地流底，性便是將椀盛得來。（卷九十八，2517 頁）

意味上、「V+得+C」方向式は方向義（例 76、例 77 など）、結果義（例 79、例 81 など）或いは動態義（例 83 など）を表すことが可能である。例 84 の“看得來”は例 25 の“看來”と同じ意味であり、「推測」の意味を表しており、“得”の虚詞化の程度が他の「V+得+C」方向式における“得”よりも高い。

2.3 「V+取+C」方向式

《朱子語類》には「V+取+C」方向式が 4 例しか見られていない。述語動詞は全て単音節動詞で、補語は単音節方向動詞“去”である。“取”が「取得」

義を持たない述語動詞の後ろに付き、「動作・行為の実現・完了」を表す。述語動詞が「除く」という意味を持つ他動詞“脱”、“斫”の場合、「V+取+C」方向式は「述語動詞の示す動作・行為によって受動者を元の場所から除く」という結果義を表す。

(89) 覺得目前盡是面諛脱取官職去底人，恐山林間有人才，欲得知。（卷一百一，2570頁）

(90) 今日要做好文者，但讀《史》、《漢》、韓、柳而不能，便請斫取老僧頭去！（卷一百三十九，3321頁）

述語動詞が“説”の場合、「V+取+C」方向式は「述語動詞の表す動作・行為の持続」という動態義を表す。

(91) 其有知得某人詩好，某人詩不好者，亦只是見已前人如此説，便承虛接響説取去。（卷一百一十六，2802頁）

(92) 自浮沉了二十年，只是説取去，今乃知當涵養。（卷一百一十九，2866頁）

「V+取+C」方向式は受動客語を伴うことができる。受動客語は「V取」とCの間に置かれる（例89、例90）。

「V+取+C」方向式の否定形式や、処置文・受身文など他の文法構造と共に起する例が見られない。

3. 「V+C」方向式と「V+P+C」方向式の比較研究

《朱子語類》における「V+C」方向式と「V+P+C」方向式の使用状況を表1と表2のように整理することができる。

表1 《朱子語類》における「V+C」方向式と「V+P+C」方向式の出現回数

形 式		出現回数
「V + C」方向式 (合計 1541 例)	「V + C ₁ /C ₂ 」	1325 例
	「V + C ₁ C ₂ 」	216 例
「V + P + C」方向式 (合計 176 例)	「V + 將 + C」	132 例
	「V + 得 + C」	40 例
	「V + 取 + C」	4 例

表2 《朱子語類》における方向補語動詞の使用状況⁹⁾

補語動詞	形式	「V + P + C」方向式		
	「V + C」方向式	「V + 將 + C」	「V + 得 + C」	「V + 取 + C」
來	○	○	○	×
去	○	○	○	○
上	○	○	×	×
下	○	×	○	×
出	○	○	○	×
入	○	×	×	×
起	○	×	○	×
過	○	×	×	×
開	○	×	×	×
回(回)	○	×	×	×
歸	○	×	×	×
上來	○	×	×	×
上去	○	×	×	×
下來	○	×	×	×
下去	○	○	×	×
出來	○	○	○	×
出去	○	○	×	×
入來	○	×	×	×
入去	○	×	×	×
起來	○	×	×	×
起去	○	×	×	×
回來(回來)	○	×	×	×
過來	○	×	×	×
過去	○	×	×	×
開去	○	×	×	×
歸來	○	×	○	×

表1から分かるように、《朱子語類》において、「V+C」方向式は1541例、「V+P+C」方向式は176例見られ（出現回数の比率は約8.8:1）、「V+C」方向式の使用が圧倒的に多い。

⁹⁾《朱子語類》における各類型の方向式に左列の方向補語が使用される場合、「○」を、使用されない場合、「×」をつけて表示する。

表2から、《朱子語類》において、「V+C」方向式の補語動詞は上掲26種の方向動詞が豊富に使われる一方、「V+P+C」方向式にみられる方向補語は、「來」、「去」、「上」、「下」、「出」、「起」、「下去」、「出來」、「出去」、「歸來」など10種であることが分かる。

《朱子語類》における「V+C」方向式は唐五代の「V+C」方向式¹⁰⁾を継承する一方で、それを発展させてきた。唐五代の「V+C」方向式の前項述語動詞は主に単音節動詞であり、二音節述語動詞はあまり見られなかったが、《朱子語類》における「V+C」方向式は、述語動詞は単音節動詞に限らず、「附會」、「湊合」、「迸裂」などの二音節動詞と「操存涵養」などの連語動詞もよく見られる。唐五代の《祖堂集》には、「V+C₁C₂」方向式が13例みられ、複合方向補語になるのは「上來」、「下來」、「起來」、「出去」、「過去」などであり¹¹⁾、全て方向義を表す。敦煌變文には、「V+C₁C₂」方向式が12例みられ、複合方向補語になるのは「入來」、「出來」、「出去」、「回來（回來）」、「過來」、「過去」、「歸來」などであり、「出來」だけは結果義を表すことができ、他の複合方向補語は全て方向義を表す¹²⁾。一方、《朱子語類》における「V+C₁C₂」方向式は216例見られ、上掲した唐五代の《祖堂集》と敦煌變文に見られた複合方向補語のほかに、「上去」、「下去」、「入去」、「起去」、「開去」なども《朱子語類》に見られる。複合方向補語のうち、「下來」、「出來」、「出去」、「起來」、「過來」、「過去」、「開去」は結果義を、「起來」、「起去」は動態義を表すことが可能である。つまり、《朱子語類》の時期になると、「V+C₁C₂」方向式の使用が数多く見られるようになるとともに、複合方向補語の成分と、それが表す意味も多様になった。また、現代中国語（「普通話」）には見られない複合方向補語「入來」、「入去」、「起去」は、《朱子語類》においてその使用が見られる。

「V+P+C」方向式は、宋・元・明代における特別な方向補語構造である。《朱子語類》における「V+將+C」方向式と「V+得+C」方向式の使用類

¹⁰⁾ 唐五代の《祖堂集》・敦煌變文における方向補語構造については、主に吳福祥1996《敦煌變文語法研究》、張美蘭2003《〈祖堂集〉語法研究》を参考にした。

¹¹⁾ 張美蘭（2003：285）には、「V+C₁C₂」方向式は14例あると述べられているが、張のあげた「流將出來」は、小稿では「V+將+C」方向式に分類される。

¹²⁾ 吳福祥1996：391。

度と補語動詞の種類などが「V+C」方向式に及ばないが、唐五代の《祖堂集》・敦煌變文と比較してみると、補語Cがより豊富になり、“來”、“去”、“出來”のほかにも、“上”、“下”、“出”、“起”、“下去”、“出去”、“歸來”なども使用されるようになった。この事実から、《朱子語類》の時期になると、「V+將+C」方向式と「V+得+C」方向式も発展してきたことを物語っている。「V+取+C」方向式は宋代以前の文献にはあまり多く見られない。唐五代の《祖堂集》には、“脫取納衣來”（卷9）のように補語動詞は“來”の例しか見られない。《朱子語類》には「V+取+C」方向式が4例しか見られず、補語動詞は全て“去”である。曹广順（1995：70）によると、“取”字带补语的用法，应当是在带补语的‘得’字影响下产生的。”と指摘している。

「V+P+C」方向式における文法標識“將”、“得”、“取”がその語彙特有の具体的で詳細な意味を持つのと異なり、具体的な結果義を持たず、ただ「動作・行為の持続」或いは「動作・行為の実現・完了」を表すに過ぎない。文法標識“將”、“得”、“取”があってもなくても情報伝達にはほとんど影響がない。以下の例を比較してみよう。

- (93a) 只是加一倍推將去。(卷一百, 2547 頁)
- (93b) 《經世》是推步, 是一分爲二, 二分爲四, 四分爲八, 八分爲十六, 十六分爲三十二, 又從裏面細推去。(卷一百, 2547 頁)
- (94a) 只是且放寬看將去, 不要守殺了。(卷九十七, 2489 頁)
- (94b) 少間漸漸節次看去, 自解通透。(卷一百四, 2613 頁)
- (95a) 事事物物, 皆具天理, 皆是仁做得出來。(卷九十八, 2510 頁)
- (95b) 體物, 猶言爲物之體也, 蓋物物有箇天理; 體事, 謂事事是仁做出來。(卷九十八, 2509 頁)
- (96a) 自浮沉了二十年, 只是說取去, 今乃知當涵養。(卷一百一十九, 2866 頁)
- (96b) 又說出時, 其他又無人曉, 只據他一面說去, 無朋友議論, 所以未精也。(卷一百一, 2561 頁)

上掲した例 93a と 93b、例 94a と 94b、例 95a と 95b、例 96a と 96b をそれぞれ比較してみると、a の「V+P+C」方向式と b の「V+C」方向式は情報

伝達の機能上においてはほぼ同じ働きをしていることが分かる。形式上においては、「V+P+C」方向式は文法標識“將”、“得”、“取”がある点で、「V+C」方向式より複雑である。つまり、「V+P+C」方向式は「有標」であり、「V+C」方向式は「無標」である。無標の方が言語運用の点から代表性と経済性を備えているために、より人々に受け入れられやすい。

また、「V+C」方向式が処置文や受身文など他の文法構造と共起する例がよく見られる。一方、「V+P+C」方向式の中に、「V+將+C」方向式が処置文、受身文と共起する例が見られるが、「V+得+C」方向式が処置文と共起する例が1例しか見られず、受身文と共起する例が見られない。「V+取+C」方向式が処置文、受身文と共起する例が見られない。

以上述べたことをまとめると、《朱子語類》において、「V+C」方向式と「V+P+C」方向式が情報伝達の機能上においてはほぼ同じ働きをしているが、「V+C」方向式は「無標」の構造として、使用頻度が「V+P+C」方向式より圧倒的に高く、補語動詞の種類もより豊富であり、他の文法構造との結合能力がより強く、「V+P+C」方向式に比べて、優位を占めていると言える。

4. おわりに

以上、《朱子語類》における方向補語構造の使用状況を初歩的に考察した。《朱子語類》には、「V+C₁/C₂」、「V+C₁C₂」、「V+將+C」、「V+得+C」、「V+取+C」の5つの方向式が見られる。こうした形式の剰余性は、表現の明確性の原則に反することであるため、言語体系内で次第に限られた形式へと整理されていく。現代中国語の“普通话”では、「V+C₁/C₂」と「V+C₁C₂」の2形式(つまり、「V+C」方向式)は残されているが、「V+將+C」、「V+得+C」、「V+取+C」の3形式(つまり、「V+P+C」方向式)はみられなくなった。「V+C」方向式と「V+P+C」方向式が情報伝達上の類似性と「V+C」方向式が形式上の「無標」性は「V+P+C」方向式が徐々に用いられなくなった原因であると考えられる。

同じ文献資料に複数の形式が類似する意味を表すことができるのは興味深い問題であり、なぜこの5つの方向式が《朱子語類》に見られるのか、また形式以外に異なる点はないかなど、これらの問題については、《朱子語類》1

～96 卷（1 冊～6 冊）の調査を通して考察する必要があるだろう。

【参考文献】

- 《祖堂集》释静·释筠编撰、吴福祥·顾之川点校 岳麓书社 1996
《敦煌变文集新书》潘重规著 天津出版社 1994
《朱子语类》黎靖德编、王星贤点校 中华书局 1986
玄幸子 1985 「敦煌変文に於ける V 得について」『中国語学』 232
曹广顺 1995 《近代汉语助词》北京：语文出版社
陈丽 2002 《〈朱子语类〉中的结果补语式和趋向补语式》《语言学论丛》第二十五辑
刘子瑜 2008 《〈朱子语类〉述补结构研究》北京：商务印书馆
吴福祥 1996 《敦煌变文语法研究》长沙：岳麓书社
王锦慧 2005 〈复合趋向补语在宋代的发展：以《朱子语类》作为考察〉国立台湾师范大学国文学系《国文学报》第 37 期
张美兰 2003 《〈祖堂集〉语法研究》北京：商务印书馆
蔡娟 2013a 「宋代白話文献における動補構造の“將”——《碧岩录》、《朱子语类》を中心に——」『中国言語文化学研究』第 2 号 大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻
——2013b 「宋代白話文献における動補構造の“得”——動態助詞と構造助詞を中心に——」『中国語研究』第 55 号 白帝社